

C. Nepal: Seti Khola, Annapurna Himal, 10500 ft (Stainton, Sykes & Williams, no. 6687, Aug. 5, 1954, fl. —type in BM).

This plant is certainly closely allied to *Codonopsis rotundifolia* Benth., but has glabrous stems, petioles and peduncles, acutish entire glabrescent leaves, and glabrous acutish calyx-lobes.

\* \* \* \*

129 & 130) ヒマラヤ産のこれら 2 種は、外部形態と花粉の形質から *Persicaria* に属していることが分かったので新組合せを作った。

131) *Clematis tibetana* O. Kuntze ヒマラヤ産の *Clematis orientalis* 類の植物は近年別種とみなされることが多いが、その場合はこれまで見落されていた O. Kuntze の名を起用すべきであると思う。

132) *Glaribraya Lowndesii* Hara (新属新種) 中部ネパール高山産のアブラナ科植物。この標本は数年前から気になっていたもので、英国で Kew, British Museum, Edinburgh のアジア産標本をはしから当ててみたが近いものは見当らなかった。成熟した種子が見られないのが気がかりだが、新属として発表することにした。

133) *Rubus hypargyryrus* Edgew. ヒマラヤに普通に見られる下面に白綿毛を密布した 3 小葉をもったウラボシ科の一種の学名を考訂した。

134) *Galium exile* Hook. f. シッキムから記載されたきわめて繊細な一種で、これまで正体のはっきりしなかったが、タイプを検討して中国から記載された *G. Handellii* と同種であることを明らかにした。

135) *Codonopsis nepalensis* Hara (新種) ヒカゲツルニンジンに近いネパールヒマラヤ産の一種である。

### ○近頃の生物界の分けかた (小林義雄) Yosio KOBAYASI: The conception of kingdoms adopted by Whittacker and Margulis

生物を幾つかの界に分けるという考えについては、リンネの *Systema Naturae* など古いところはさておき、Haeckel (1866, 1894) 以来多くの生物科学評論家によって、それぞれ独自のシステムが発表されて来た。近頃になって Whittacker (1969) が生物を 5 界、即ち Monera, Protista, Plantae, Fungi, Animalia に分けることをサイエンス誌上で提唱したが、従来日蔭者扱いされて来た菌類が、動物、植物と対等の位置に扱われたこともあって、菌学関係者からは好意を以て迎えられ、間もなくイギリスで出版の菌類辞典 (1971) にもその図式が掲載された。その後日本や諸外国の菌類書や教科書にもこれが転載されて来た。しかしそれらの書では無解説、無批判のものが多く一種の流行の感がする。その流行も数年経過すると、そろそろそれに代る新しいものが

待たれる訳である。それに応ずるように出現したのが Lynn Margulis 女史のシステムである。W氏とは見方を変えた変形とでもいうべきものである。彼女の主張の根本は幾つかの Monera (無核生物界) 細胞の自然合成によって、有核細胞が現れるという点にある。そして、その主張を著書 *Origin of eukaryotic cells* (1970) にまとめた。その扉絵の大体の構成はW氏の図式に似て居り、多くの代表的生活の模式図が適当に配置されているので、一層興味が持てる。M女史の考え方はアメリカの通俗書にも紹介され、1975年にレニングラードで開かれた国際植物学大会では、特別講演として大講堂に多くの聴衆を引きつけ、如何に多くの生物学者や一般人の人気を呼んでいるかを実証した。さて1977年にフロリダのタンパで開かれた第2回国際菌学大会では、再び彼女の特別講演が持たれ、自説を一層具体化して紹介された。Protists という用語の代りに、Protoctista を用いていたが、これは既に Copeland (1947, 1956) が創作した名である。さて前記のW氏が植物、菌類、動物の3界を区別した基準は、それらが Producer, Reducer, Consumer という物質循環の役割りを果しているという考え方を採ったのであるが、M女史は核相を中心にして居る。即ち植物は Haplo-diploids, 菌類は Haploids + Dikaryon, 動物は Diploid と見ている。

斯様にM氏に代る一層目新しいシステムが現れたのであるから、今後数年間は新しく出版される分類書や通俗書に、何度も紹介されるに相異ない。ここで私が望むことは、それらの執筆者が単に目新しいものを追うようにM女史の図式を載せるのではなく、内容の簡単な説明や、批判を添えてほしいことである。無批判に図式のみを転載することは避けたいものである、しかしそのうちに、気のきいた分類の特徴を持出してM女史のシステムを変え、或は新しい界の分け方を発表する者が現れるかも知れない。界とは門、綱、目……等の Taxa の最上位のものには相異ないが、飽くまで概念的のものであって、強いて分ける必要もないかも知れない。

ここで一寸W氏やM女史の考えている Protista (又は Protoctista) を批評すると、真に整理されて居らない集団であり、彼等の云う植物、菌類、動物の三界に編入するには都合の悪いものを、すべてこの集団の中に投げ込んでいる。例えば接合菌以外の水棲菌や単細胞の菌、アメーバ状の時代のある菌など、すべてこの中に入れられてある。云わば混沌界 (Chaos) である。私など水棲菌学者は、さしづめ三界に身を置くところのないコントン学者と云うべきか。なおこれらのシステムでは、ウイルスと人類に関してはあまり的確な位置づけを行って居らない。ウイルスを現在も新しく形成されつつある後生的な有機体とするならば、彼等の処置は一応納得出来る。人類 (界) は発生以来年月も短く、生物学者として論及するに足らないのか、或は家畜のように飼育されたものであるためか、或はあまりに崇高な存在であるために、他の生物と並べて論じ難いのか、何れにしても、色々と差し障りがあるものと思われる。 (国立科学博物館)